

切り拓かれた南高

われらの前には道はない



「われらの前には道はない」から60年間、南高はどのような道を創り、今に至ったのだろうか。この紆余曲折したであろう60年間を振り返るために、南高新聞、記念誌を紐解く一方で、卒業生の先生たち取材しながらまとめた。

感動と不安が交錯した一日目

開校10周年記念誌(昭和45年9月)によると、「昭和36年4月 南高生全員矢の原台新校舎に初登校、授業開始4月18日。昭和36年4月17日松江北高校で「友情の壮行会」をうけた」とある。「友情の壮行会」



今は珍しい外廊下。雨の日や雪の日は濡れながら教室移動した。(34期 記録写真より)

これは大変有名な話だが、校門を出ていったあとはどうしたのだろうか。同じ記念誌に狩野道彦先生が「回想の十年」で次のように書かれているので紹介しよう。「(略) 総勢297名の南高職員生徒は、3列縦隊で校門を出ていった。(略) 北高の職員生徒が道路の両端に並び、手をふり、帽子をふり、ハンカチをふり、声をしぼっての大声援である。このときばかりはシーンとこみ上げるものがあった(略) こうした兄弟校の強い友愛が、そのときの2、3年生、すなわち松高生と入学した諸君が卒業する頃までは特に強かつ

Table with 2 columns: 発行所 (60周年実行委員会 松江南高校新聞部) and 特集 (1 南高のはじまり, 2 「清明」の碑, 3 生徒会リコール, 4 時の流れを解く)

ないない尽くしの学校 晴れてようが長靴

表題の「われらの前には道はない」とは、60年前、木島俊太郎初代校長が第1期生の入学式で発した言葉である。当時の南高に与えられたのは「ガランドウの特別教室1棟(16教室)だけ

それから60年の歳月が流れた。1学年7学級でスタートした南高は、その後、最大1学年10学級の時代を迎えるが減員と増員を繰り返した。そして、現在、開校の時と同じ1学年7クラスとなった。その間、理数科も設置されたが(1969)、今年から理数科にかわって探究科学科2学級に改編され、今の2年

Reproduction of the school newspaper page 'われらの前には道はない' (No path in front of us), including the title, introductory text, and a photo of the school building.

南高新聞第1号(昭和36年10月2日発行)

モノも、精神的な柱もなかった。生徒会はもちろん学校運営にいたるまでまったく「道はなかった」のだ。まず、あるモノといえは教室などの入る校舎のみで、グラウンドや体育館などはなかった。しかも学校の前の道は舗装されておらず、もともとは田んぼとろっそうとした森が茂るような道であった。そのため晴れていようが長靴がマストアイテムだった。さらに、精神的な柱になる校訓や校歌など受け継がれる伝統行事なども全く存在していなかった。校歌や校訓は学校のシンボル、精神的支柱である。ましてや60年前は学校の誇りというものが今より重視された時代であったため、いち早くそういったものを確立した

(虎)

南高新聞・記念誌から読み解く

# 不易と流行

このデコを超えることができるか



立体デコが印象的な体育祭 (5期 記録写真より)

## 「清明」の碑

### 南高としての決意

校舎の周辺には、さまざまな石碑が建っている。卒業記念の石碑も残る。日々、何気なく通り過ぎていく石碑であるが、そこに込められた思いを再確認してみた。

昭和61年度、開校25周年を記念し「清明」の碑が建立された。この建立の裏には、当時の南高にシンボルというか柱といった核になる、確かなものがなかったことがある。そのため当時の校長、PTA会長を中心に進められた事業だった。「北高の赤山への復帰を機に、すでに昭和54年に本校は松江中学以来の同窓会である「双松会」からも分離しており、松江中学・松江高校以来の伝統を内面に含みつつも、南高としてのアイデンティティを真に創造継承する時代へと進んでいったのである。」(40周年記念誌)つまり、松江北高校から精神的にも自立し、松江北高校のコピーでも分身でもない独自の道を歩むことを決意した、その石碑である。

昭和40年代には多くの石碑が作られた。昭和40年(1965)、校歌碑が、翌年には「質実剛健」の碑が建てられた。そして、昭和45年(1970)、「創造の碑」が建立された。「清明」の碑以降、南高校の歩むべきあり方、スクールアイデンティティの確立が目指された時期だ。

しかし、多くの石碑は、校舎改築により移動を

余儀なくされたり、周囲の草木が大きくなったりと当時の存在が薄れていきがちなのは残念である。読者の皆さんは、それらの存在をどのくらい知っているだろうか。言われたら、あったような気がする・・・かも知れない。あらためて石碑に込められた思いに触れたい。



毎日、私たちの登下校を見守る「清明」の碑

Q1 「創造の碑」はどこにある?  
①南門 ②記念館入り口 ③正門 ④食堂前  
答えは、編集後記。



### 校章の由来

南高開校にあたって、当時の松江高在校生より、南高校章を募集した。結局美術科錦織保久教諭が考案し、先の応募作品と共に松江高職員、生徒に選考してもらった結果、錦織教諭の作品に決定した。校章は、友愛・健康・理性を意味し、リズムミカルな線で表現したものである。

開校十周年記念誌より抜粋

### 生徒会 市に陳情?

### 生徒も動いた体育館建設

南高の校舎が建てられる際には様々な問題が起きた。その様子は60年前に発行された南高新聞にも克明に記されている。例えば物価上昇に伴う建築資材の不足や、土地整備の際に費用が想定以上に上がったため、資金不足に陥り、そのやりくりのために校舎の窓を小さくしたり、いくつかの設備の設置が延期になったりと、一筋縄ではいかなかったようだ。

現在の南高校舎は、今から20年前の平成14年に竣工した。その頃から、こんなことがよく言われるようになった。「南高は迷宮のようだ」と。この事には、南高に一度訪れたことがある人なら皆うなずくだろう。

### 迷宮 南校舎の謎

記念館や体育館を含め、合計で11の棟(当部調べ)からなり、階層は地階〜4階までの合計5階、縦にも横にも広いうえに、階ごとに微妙に廊下の形が違うなど、迷宮

状態になった。結局陳情は出されなかったが、南高が開校した時代は生徒の熱意と行動力に陳情を出すか検討するられない。(寺)

極めつけは、開校式までに体育館の建設が間に合わず、開校式が延期されたにもかかわらず結局完成しなかったため、既に完成していた柔剣道場で開校式をする羽目になったことだろう。結局、体育館は開校してからしばらくの間建設が続い

た。この「体育館できるの遅すぎ問題」は、生徒の間でも不満の声が上がった。一時期は生徒会で市に陳情を出すか検討するられない。(寺)

Q2 南高改築の総事業費はいくらだった?  
①5億円 ②10億円 ③20億円 ④50億円

が大嫌いかと言えどもでもない。それは校舎に長くいるがゆえの愛着だろう。何はともあれ、南高という「迷宮」は矢の原台上に今日もそそり立っているのだ。建設は、平成8年度から検討が重ねられていた。なかでも目を引いたものが、島根県教育委員会を中心とした湘南高校(神奈川県)や伊奈学園総合高校(埼玉県)への視察、さらには南高の視察団が訪問した高松高校と高松桜井高校である。これらの高校に共通していたものは、教科教室型であった。つまり、HRを中心に授業を展開する従前の形態ではなく、教科ごとに専用の教室を設置して、生徒が毎時間教室を移動して授業をその専用教室で受けるという形態の教室整備方式である。しかし、結局は職員室の分散、教科ごとのメディアスペースの導入などにとどまり、今の校舎に落ち着いた。(龍)

# 生徒会長 リコール制度

リコール制度をご存じだろうか。ある団体の長や役員について有権者が辞任を要求することができるといふものだ。解職請求権ともいう。地方自治体に採用されている制度だ。

そして南高にはこのリコール制度が存在する。開校から1年後の昭和37年、執行委員会から総会へ5つの会則改正案が提出された。提出案はそれぞれ「各委員会の委員長指名権を会長が有するようにする改正案」「生徒会選挙において有効投票が全会員数の3分の2未



学園祭の終わりは、デコレーションを燃やしてファイヤーストームとフォークダンス (21期 記録写真より)

満の場合、再選挙とする改正案」「会長立候補者が1名の時には信任投票を行う条項の設立」「会則の補足案」。そして「リコール制度案」だった。

今では考えられないことだが、この時成立したのは後ろ3つ「信任投票」「会則補足案」「リコール制」のみで前の2つ「委員長指名権」「再選挙」は否決されていた。この否決の時点ですでに生徒自身の生徒による自治への高い関心が伺えるが、やはり特筆すべきは「リコール制」だ。

その条文は長いので文章では割愛せざるを得ないが、中は地方自治体のそれと何ら変わりない。まず署名が集められ、その数に応じて評議会と総会、または総会のみ「解職案」が提出され審議。そして可決されれば会長はその職を辞することになる。

実は、このリコール制度は約60年の時を経て現在も残っており、我々生徒会長がその気になれば解職請求ができる。この制度の意義は何だろうか。一番は有権者たる生徒会員が不利益を被らないようにするためだろう。しかし、それ以上の意義がこの制度にはあるようないかならぬ。

この状況を端的に表しているのが「生徒会」という言葉がどういう使われ方をしているのかという話だ。よく、こう話している人を見る。「生徒会に入るの?」「生徒会は大変じゃない?」この言葉はよく考えると正しくない。なぜならば生徒会とは「全校生徒を会員とする」機関であって、「選ばれた人が入る機関」ではないからだ。全校生徒が生徒会員であるはずだ。しかし今、「生

無関心に苦勞している。徒会」は執行部という意味で使われている。自分たちの意見を代弁し、行動に移す機関としてみて

## 高い理想

## 現実的な職業選択

こう銘打たれた記事は、開校から1年経った昭和37年発行の南高新聞に掲載された。この記事では「自分の精神生活を一しよにふりかえってみるための一つのきっかけになれば幸甚です(原文ママ)」として、南高生の悩みや将来の理想・人

まず「悩みごと」である。勉強はもろろんのこと、進路や恋愛、高校生に「悩みごと」はつきものだ。この記事では「悩みごと」として49・5%の生徒が「学習面」を挙げた。これは予想通りと言ったところだろう。

次に「進路」について見ていこう。この記事では職業選択についてのアンケートも取り「南高生は将来に対して大きな理想を抱いて生活している一方、いざ職業選択をするとなると現実的なものが多い」という分析がさ

識の上に、「自分たちが学ぶところを良くするのは自分たち」という精神

の下の犠牲に成り立っていることを忘れてはならない。(虎)

## こんなこともありました



香ばしいおこげがおいしい飯盒(はんごう)炊飯 (20期 記録写真より)

たよつた。青春の1コマ。最近、復活の兆しもあるとか・・・時代は繰り返される。

## 新聞部が勝手に選んだ卒業生の有名人 (財政界の方を除く) (敬称略)

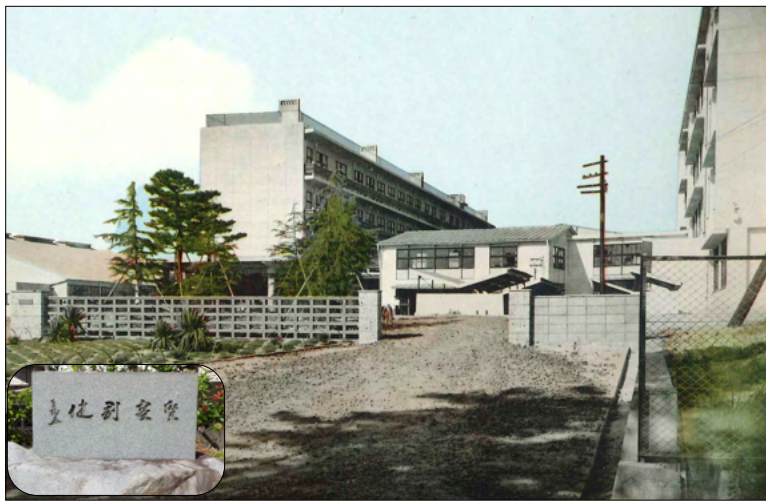
- 1 佐野史郎
- 2 山本恭司
- 3 福島弓子
- 4 福島敦子
- 5 浜田真理子
- (6) 小村徳男



(54期 記録写真より)

また、ベテランの本校卒業生の先生と昔の思い出話によく登場するのが大山キャンパや遠足(写真右)である。平成に入り、しばらくしてスキー研修にかわっている。このキャンパや遠足では、勝手に鍋や肉などを持参してバーベキューを楽しむんだらしい。炊事場ではない場所でも火器を使用して炊飯をする。とても今のご時世では考えられないからこそ、楽しかったことだろう。(一)

このソックスの名前はなに?  
 ①ダボダボソックス  
 ②ルーズソックス  
 ③カジュアルソックス  
 ④ファッションソックス



質実剛健の碑



竣工記念の碑(植樹) (記念館横)

# 楽しい時も辛い時も みんなを出迎える正門

## 時の流れを解く 先生の高校時代はどうでした？

南高の歴史を知るのに、記念誌や学校新聞を読む方法がある一方で、この40年間、生徒として、また現在、教員として勤められている先生に取材をして、その時代とともに当時の南高の様子から学校の変貌を探ってみた。ちなみに、取材をお願いしたのは、ほぼ10年(期)単位で南高生を過ごされた先生たちだ。

1980年代は南高の全盛期だった。それは単純に合計30クラスを数えた学校の規模としてでもあるが、今回私が特筆したいのは、もうひとつの意味での全盛期「スパルタ」の全盛期だ。

「何回書いてくれてもいい、厳しかった」そう語るの、石橋一美先生だ。先生は当時の事をこう語る。「徹底的に追い詰められた。途中で心が折れてしまう人もいた」毎日の指導の厳しさに、生徒には身体や、その神経まですり減らして日々を送る人も多かった。「同級生の中には『当時のこの取材なんか受けたくない』という人もいた

「これは今にも通じるころがあるだろう。もちろん、純粋に勉強が好きで南高に通う生徒もいるだろう、しかし、この学校は部活が盛んであり、文武両道と言われる。これは勉強以外に部活も楽しみにして南高に来て

いる生徒もいると語る。先生は当時、文化祭のクラス展示として短編映画を制作したことが強く



石橋一美先生

スパルタです!!

思い出に残っているといい、こう振り返る。「クリエイティブが上手だった」と。厳しい中で、生徒は創意工夫によって学校生活を模索していたのだろう。

続く1990年代を野津賢士先生に訊いた。

「スパルタ」の終盤だった。しかし、終盤だからといって、少しは優しくなっていた訳でもなく、我々からすれば身の毛も



野津賢士先生

教室の鉄扉のさびがノートに...

よだつような指導の数々である。紙上に書いていない時点で、その内容は察していただきたい。

しかし、「生徒は割と自由だった」と先生は話す。学園祭の際には少し攻めた内容の展示をしたりと「許されはしないがワイワイ出来る雰囲気」の中で生徒は生活していた。「それには責任が伴うから今より大人びた人が多かった」とも先生は話す。実は、今回の取材ではこう言った先生がかなり多かった。「昔より、今の子はある意味幼い」。取材を通して見えてきたこの事は我々も少しは心にとどめておきた



和泉桃子さん

「コギャル」全盛期!!

そして、遂に時代は2000年代へと移る。旧校舎が取り壊され新校舎へと変わったのもこの頃だ。個人的にこの事はただ単に校舎の変化というだけではなく、南高の精神そのものの変化だったように思える。当時のことを話して下さったのは事務をされている和泉桃子さんだ。当時は「コギャル」ブーム全盛期であり、もれなく南高もそのブームに乗った。ブームの象徴ともいえる「ルースソックス」を代表として、染髪やピアス、超が付くショートスカートといった格好の女子生徒、いわゆる「ギャル」や「腰パン」をした男子生徒が南高で



舟木亮介先生

毎月課題テストでした

も見られたという。当時と今を比べ、和泉さんは「廊下で先生に会ったら挨拶をしていたり、礼儀正しくてすごいと思う」「自分の子どもも南高に入学させたいと思う」と語る。確かに、このことは少し胸を張れることかもしれない。そして、今回の記事における最後の年代、2010年代を代表して舟木亮介先生に取材した。

「当時は今より進学意識が高かった」と語る先生。そのこともあってか、「テスト地獄」だったという。「今は探究の授業といった機会もあり、広く視野を持つという人が多し」「真面目は変わらない」この言葉は変わらない。

### 編集後記

思えば、新聞部に入ることすら入学時は思ってもいなかったことです。人生では一寸先の事も分かりません。偶然や必然、言い表す言葉はたくさんあれど、肝は今をどう受け取り、動くかだと思われ

なかなかな大変な編集作業でした。特に、扱うこのない大きさの紙面に苦勞しました。(一)

- Q1の解答は②
- Q2の解答は④
- Q3の解答は②

